

チベット文字轉寫とチベット語表記

北村 甫・西田龍雄

＜チベット文字をローマ字によつて轉寫する方法は、現在いろいろ行われていま
す。またチベット語を表記するシステムも、報告者によつてまちまちであり、誤り
も多いと思います。それらについて、今までに用いられている代表的な方法に對し
て、今後私達が用いていきたい試案を提出してみました。これは一つの試案であり
ますから、不備な點につき御教示を得れば幸いです＞

1. まずチベット文字の轉寫 (transliteration) とチベット語の表記 (transcription) という2つのちがつた事柄をはつきりと區別しておかねばならない。チベット語は古代語現代語を問はず、またいづれの方言でもチベット文字を用いて書きあらわされるから、文字の轉寫は一つの方法で統一することができる。しかし、チベット語を表記する場合には、そのようにはいかない。現代チベット語には、いろいろの方言があつて、それぞれ異つた「言語體系」をもつていると考えられるから、一つの表記法を用いてすべての方言に適用することは許されない。たとえばラッサ方言とアムド方言は實際にちがつた言語體系をもつていることを證明できる以上、同じ表記法を用いてこの2方言をあらわすことは正しくはない。つまり表記法とは限定された方言を對象として設定される「音素體系」にもとづいて考え出されるべきであつて同一の「音素體系」をもつ言語以外には適用され得ないものである。しかし、我々は、50もの方言に對して一々表記法を考え出し使い分けることは、特別の目的以外には實際上必要ではない。現代チベット語の表記法はいわゆる標準語と稱せられる中央チベット語の音素體系を中心とし、それにラサ方言(雅語)の體系を考慮に入れて、作り出されるのがもつとも有用であるように思われる。このような表記法を定めておくことは、現代チベット語を言語學的な對象としてではなく問題にするときに、またカナ文字による表記法を考案するときにも必要であるように思う。

3. チベット文字の轉寫には、つぎの對照表に見られる代表的なシステムが今までに用いられた。

	Jäschke.	Das.	Bacot.	Thomas.	Tucci.	Roerich.	寺本	東北	金鵬
1	ཀ	k	k	k	k	k	k	k	k
2	ཁ	k'	kh	kh	k'	kh	kh	kh	kh
3	ག	g	g	g	g	g	g	g	g
	(添前字)	ɣ	g	g	g	g	g	g	g
4	ང	ñ	ñ	ñ	ñ	ñ	ñ	ñ	ñ
5	ཅ	c	č	c	c	č	c	c	c
6	ཆ	č'	ch	čh	ch	čh	ch	ch	ch
7	ཇ	j	j	j	j	j	j	j	j
8	ཉ	ny	ñ	ñ	ñ	ñ	ñ	ñ	ñ
9	ཏ	t	t	t	t	t	t	t	t
10	ཐ	t'	th	th	t'	th	th	th	th
11	ད	d	d	d	d	d	d	d	d
	(添前字)	d	d	d	d	d	d	d	d
12	ན	n	n	n	n	n	n	n	n
13	པ	p	p	p	p	p	p	p	p
14	ཕ	p'	ph	ph	p'	ph	ph	ph	ph
15	བ	b	b, w	b	b	b	b	b	b
	(添前字)	b	b	b	b	b	b	b	b

日本西藏學會々報

第七號

昭和35年十月吉日發行
 編集發行人 三上諦 俯聽
 發行所 大庭
 關西大學東西學術研究所
 日本西藏學會

16	མ	m	m	m	m	m	m	m	m	m
17	ཚ	ts	ts	c	ts	ts	ts	ts	ts	ts
18	ཚའ	t's	tsh	ch	tsh	ts'	tsh	tsh	tsh	tsh
19	ཇ	dz	ds	j	dz	ds	dz	ds	ds	ds
20	འ	w	w	v	w	v	w	w	w	w
	(下接字)	w.	w	v	w	v(w)	w	w	w	w
21	ཞ	ž	sh	ž	ž	ž	ž	sh	sh	zh
22	ཟ	z	z	z	z	z	z	z	z	z
23	ཨ	a	h	'	h(h)	'	'	h	h	h
	(添後字)		h	'	h(h)	'	'	h	h	h
	(添前字)	o	h	'	h(h)	a	'	h	h	h
24	ཡ	y	y	y	y	y	y	y	y	y
25	ར	r	r	r	r	r	r	r	r	r
	(上接字)		r							
26	ལ	l	l	l	l	l	l	l	l	l
	(上接字)		l							
27	ཤ	ś	ç	ś	ś	ś	ç	ś	ś	sh
28	ས	s	s	s	s	s	s	s	s	s
	(上接字)		s							
29	ཧ	h	h	h	h	h	h	h	h	h
30	ཨ	'a	a	a	a	a	a	a	a	xa

母音文字の a, u, e, o にはすべてが共通して i, u, e, o. を用いる。^①

以上の9種の轉寫法の中で、いずれもがびたりと一致しない。寺本法と東北法はほとんど一致するけれども、27を前者は ç で後者は ś をもつて轉寫する點は一致しない。Jäschke 法と Tucci 法もよく似ているけれども、3 (添前字)を Jäschke は γ, Tucci は g とし、8 を Jäschke は ny, Tucci は ñ, 20を Jäschke w, Tucci v とするなどのちがいがあつた。つぎに我々のシステムを提案する。

これは上記のシステムと大部分が並行するけれども、そのいずれとも嚴密には一致していない。

1. k 2. kh 3. g 4. ng 5. c 6. ch 7. j 8. ny 9. t 10. th 11. d 12. n 13. p 14. ph
 15. b 16. m 17. ts 18. tsh 19. dz 20. w 21. zh 22. z 23. h 24. y 25. r 26. l 27. sh
 28. s 29. h 30. a; i. u. e. o.

これらは印刷に便利であつて、英文タイプライターでも簡単に打ちわけられるような區別を選んだ。そして古いチベット音との一致をも考慮に入れている。よくいわれるようにチベット文字一字に對して一マ字一字をあてるのが望ましいけれども、必ずしもそのようにしなければならぬ規則はない。ただロシ、同じチベット文字に對しては、その文字がどの位置におかれていても(いわゆる添前字でも添後字でも)いつも同じローマ字で轉寫するという態度に徹する必要がある。Jäschke が添前字 g にのみ γ を用いるのはよくない。とくに區別が必要である場合、すなわち ཀྱ འ ཡ には、前者を g'ya- 後者を gya と轉寫して區別する。また一つの單語はハイフエンでつなく、rgyal-po, bkañ-hgyur のごとく。^②

4. つぎのチベット語の表記法は、中央チベット語の「音素體系」を中心に考案する。中央チベット語の「音素體系」は、チベット文字による綴字法とは別個のものであるけれども、原則的に大部分が後者と並行するから、便宜上、上述の文字と關連して述べる。

i) チベット語(中央方言)には高型と低型の2つの聲調の對立がある。たとえば tha (高型) «へり», tha (低型) «今», sa (高型) «土地», sa (低型) «惑星」。この中、低型には、末尾に ` をつけてこの聲調を區別する。tha`, sa`, のごとく。低型の聲調は原則として、有聲音(g. j. d. b. dz. w. zh. z)を基字とする場合と添前字・上接字をもたない鼻音(ng. ny. n. m) および y. r. l. にあらわれ、それ以外には高型の聲調をとる。ただし db- は高調に屬する。例 dbang, dbyar は wang, yaa で高型。^③

ii) チベット文字 k. c. t. p. ts で書かれる單語は k.c. t. p. ts [高型] をもつて、kh. ch. th. ph. tsh で書かれる單語は kh. ch. th. ph. tsh. で表記する。これに對して、g. j. d. b. dz で書かれる單語は、添前字または上接字をもたないときには、kh. ch. th. ph. tsh [低型] であり、そうでない場合は g. j. d. b. dz [低型] である。例, rkang-pa <脚> → kang-pa, khang-pa <家> → khang-pa, gang <満ちた> → khang`, sgang <岡> → gang`

iii) チベット文字 ky, khy, gy で書かれる單語には ky, khy, gy [または t, th, d] (上記の原則にしたがつて gy には khy と gy があたる) 例, khyi <犬> khyi (thi), kr, khr, gr, tr, thr, dr, pr, phr, br. には tr, thr, dr. (または t, th, d) を用いる。例, khirms <法律, 戒律> thrim (thim), phrug-gu <子供> thruk-khu` (thuk-khu`), drug <六> thruk` (thuk`) py, phy, by には c. ch. j を、例, spyang <眼(敬語)> cän, byang <北> chang`. my には ny を、例, smyon-pa <狂人> nyön-pa, mr には m を、例, smra-ba <云う> ma-wa, sr- には tr(t) または s を、例, sram <かわうそ> tram (tam), srang <兩(度量)> sang, srin-bal <棉花> trin (tin)-phää, hr- には hr を、例 hrob-hrob <ざらざらした> hrop- hrop, kl, gl, bl,

rl, sl. には l〔高型〕を, gla <賃銀> la, bla-ma <ラマ> la-ma, bslab-grwa-ba <學生> lap-thaa', zl には d を, zla-ba <月> da-wa', kw, khw. などの wa-zur をもつ場合には, k, kh. などとする, 例, lwa <羊毛布> laa', tswa <草> tsaa. そのほか dba- には wa- を dbi (u.e.o) には 'i('u,'e,'o) を, 例 dbang-cha <權力> wang-cha, dbyi <紹> 'i, dby- には y- を, 例 dbyar-ka <夏> yaa-ka, lh- には hl を用いる, 例, lha <天> hla.

iv) チベット字 s, z. は共に s, (前者は高型, 後者は低型), sh, zh. も同様に sh であり, 聲調によつて區別する. ng, n, m, ny で書かれる単語は, ng, n, m, ny で表記するが添前字または上接字をもつときには〔高型〕で, それ以外は〔低型〕によつて區別する. 接尾辭 -ba は, つねに -wa である. l. r. y. w. で書かれ, 上接字または添前字をもたないときには, iii) の諸例に對立して, [低型] の l. r. y. w である.

v) 'a-ma <母> ha-cang <甚だ>. yang-ku <はと> などの初頭の對立は, チベット文字 a, h, h̄ によつて書かれる. これを 'h, h̄ を用いて表記する. 'a-ma, ha-cang, hang-khu. (h̄ は h と聲調で區別されるから, 共に h を用いてもよい, hang'khu', hō' <光> など)

vi) いわゆる添後字をもたない場合には, 内屬母音および文字 i. u. e. o で書かれる単語は a. i. u. e. o で表記する. 添後字 -ng, -m, -k, -p をともなう場合も同じである.

チベット文字	チベット語	チベット文字	チベット語	チベット文字	チベット語	チベット文字	チベット語
ang	ang	ag	ak	am	am	ob	ap
ing	ing	ig	ik	im	im	ib	ip
ung	ung	ug	uk	um	um	ub	up
eng	eng	eg	ek	em	em	eb	ep
ong	ong	og	ok	om	om	ob	op

添後字 -n. -d. -s. -l. -r の場合にはつぎのように表記する. 再添後字は表記する必要はない.

an	än	ad	ä'	al	ää	ar	aa	as	ä'
in	in	id	i'	il	ii	ir	ii	is	i'
un	ün	ud	ü'	ul	üü	ur	uu	us	ü'
en	en	ed	e'	el	ee	er	ee	es	e'
on	ön	od	ö'	ol	öö	or	oo	os	ö'

ahi, ihi, uhi, ehi, ohi はつぎのように表記する. ngahi <私の> ngää, mihi <人の> mii, chuhi <水の> chüü, mehi, <火の> mee, so-sohi <それぞれの> so-söö.

vii) 以上をまとめると我々の表記法はつぎのようである.

k	p	t	ky(t)	tr(t)	ts	c	s	l	hl	ng	ny	'
kh	ph	th	khy(th)	thr(th)	tsh	ch	sh	r	hr	n		h
g	b	d	gy(d)	dr(d)	dz	j		y	w	m		h̄
a		i	u	e	o							
ä			ü		ö							(aa, ii, uu, ee, oo, ää, üü, öö)
聲調			高型 (表記ナシ)		低型							

注

- 1) 表記にも音聲表記と音素表記があるが, ここでは後者を問題とする. しかし, 以下に扱うのは, 厳密な意味での音素表記ではなく, 現代チベット語を簡単に書き表わす方法ということである.
- 2) ここではその字體や一二の文字の増減は問題としない. 「庫談話會プリント」
- 3) 現代までに約50の方言が報告されている. cf. 北村甫, 現代チベット語方言の分類. (1959-1 東洋文)
- 4) チベット標準語は現在はずきり規定されていないから, 今後中央方言を標準語とすべきがラサ方言を標準語とするかは大きい問題になると思う.
- 5) 中央チベット語というのは, 中央地域の種々の方言の上に蔽いかぶさつて通用する言語である. したがつて, 中央諸地域の方言 (大部分が未調査) に共通する特徴をもっているものと考えられる. 中央チベット語とラサ方言の相違については, R. A. Miller, 西藏語諸方言におけるラサ方言の孤立的地位について, 『東方學』十輯, および The independent status of the Lhasa dialect within Central Tibetan. Orbis, Tome IV. (1955) を参照されたい, ラサ方言にはさらに上流階級の雅語と一般語が區別される (cf. 金鵬). ここではラサ雅語を考慮して, それらを綜合した體系を作り出した.
- 6) 北村甫, チベット語 III 音韻, 市河三喜, 服部四郎監修「世界言語概説」下巻 p. 979 参照. つぎの表は, 以下の文獻にもとづいて作成した.

H. A. Jäschke: A Tibetan-English Dictionary. London, 1881; Sarat Chandra Das: An

Introduction to the Grammar of the Tibetan Language. Darjeeling, 1915; J. Bacot: Grammaire du tibétain littéraire. Paris, 1946; F. W. Thomas: Ancient Folk-literature from North-Eastern Tibet. Berlin, 1957; G. Tucci: The Tombs of the Tibetan Kings. Roma, 1950; G. N. Roerich: Textbook of Colloquial Tibetan. Calcutta, 1957; 寺本婉雅: 改訂増補「西藏語文法」, 京都, 1940; 東北帝國大學法文學部: 「西藏大藏經總目錄」, 仙台, 1934; 金鵬: 「藏語拉薩日喀則昌都話的比較研究」, 北京, 1958.

- 7) このほか、反轉字 \bar{r} , \bar{b} , \bar{f} , \bar{p} , \bar{m} には t , th , d , n , sh を用い、古文獻に認められる $gi-gu$ のさかきには i を用いる。
- 8) 體系の記述には R. A. Miller, Studies in Spoken Tibetan, I. Phonemics. JAOS 75 (1955) があり、語彙には、Sir Basil Gould and H.E. Richardson: Tibetan Word Book. Oxford. 1943, Ch. Bell: English-Tibetan Colloquial Dictionary. 1920 の資料がある。
- 9) 現代語の聲調と歴史的な發展については、上掲北村「チベット語」および西田龍雄、「チベット語とビルマ語におけるトネームの對應について」、『言語研究』34, p. 90-参照。
- 10) Miller 教授は、 $qaxma$ <mother>, $haxcaŋ$ <very> の對立のみを考えて文字'をもつて書かれる單語<は>と<光>などは扱っていない。また The Tibetan system of writing (ACLS. Washington 1956) p.3 では文字hに $w' y'$ をあて、そこでは實例を掲げておられないが p.26 で $rahi$ を $rayi$ <of the goat> とし、p. 19 で $hgro-baŋi$ $hdod-pa$ <the desire to go> を $dowidöpa$ とされるのが $w' y'$ の例であろう。これを初頭音とする單語を見落されているように思う。

我國に於ける西藏關係文獻目錄

(自昭和三十三年八月一日
至昭和三十四年七月三十一日)

- 一、昭和三十三年度(一九五八)
 - 浅井辰郎「チベットの氣候に關する若干の知見」法政大學文學部紀要四—地理學一(十二月)
 - 大村謙太郎「チベット史概説—西藏大藏經研究會刊(九月)
 - 上尾龍介譯「譯詩片」Aチベット民謡 B現代詩抄、中國文藝座談會ノート十一(十一月)
 - 壁瀨灌雄「佛教タントラのチベットへの展開過程」龍谷史壇四十四(十二月)
 - ブツダグフヤ密教の立場、石濱先生古稀記念東洋學論集(十一月)
 - 佐々木教悟「本生經類のチベット譯について」印度學佛教學研究七ノ一(十二月)
 - 佐藤 長「木村肥佐生氏「チベット潛行十年」を讀みて思う」日本西藏學會會報第五號(九月)
 - 「古代チベット史研究」東洋史研究叢刊五ノ一—東洋史研究會(九月)
 - 多田等觀「バルカンについて」日本西藏學會會報第五號(九月)
 - 西田龍雄「チベット語とビルマ語におけるトネームの對應について」言語研究三四(十月)
 - 壬生台舜「唐蕃會盟碑に關する問題」宗教文化一三、(十一月)
 - 芳村修基「カマラシーラの修習次第」石濱先生古稀記念東洋學論集(十一月)
 - 「河西僧曇曠の傳歴」印度學佛教學研究七ノ一(十二月)
 - 藤澤義美「唐朝雲南經營史の研究(其二)—雲南經營の挫折」岩手大學學藝部研究年報第十三卷(八月)
 - 「唐代入雲路の史的考察」岩手史學研究第二十九號(十一月)
 - 野上俊靜・稻葉正就「元の帝師について」石濱先生古稀記念東洋學論集(十一月)
 - 香川孝雄「Mahāvīryaputtiの編纂年代考」印度學佛教學研究七ノ一(十二月)
 - 矢崎正見「バクバの教學について」印度學佛教學研究七ノ一(十二月)

二、昭和三十四年度(一九五九)

- 稻葉正就「イタリアの東洋學研究の現状」日本佛教學會年報第二十四號(三月)
- 前田正名「五代及び宋初における「六谷」の地域構造に關する論考—住民構御を中心として—」東洋學報四三卷四號
- 鈴木中正「明清時代の中國とチベット—中國とその周邊諸民族との關係の一事例—」愛知大學文學論叢第十八號(三月)
- 壬生台舜 A Comparative List of the Bkhaḥ gyur Division in the Co-ne, Peking, Sde-dge and Sna-rhaḥ Editions with an Introduction to the Bkhaḥ gyur Division of the Co-ne Edition, 大正大學研究紀要卷四四(三月)
- 田村實造・佐藤長「明代西藏史料」明代滿蒙史料明實錄抄蒙古篇十所收・京都大學文學部(三月)
- 羽田野伯猷「Tantric Buddhismにおける人間存在」東北大學文學部研究年報第九號(一月)
- Miller, R. A., The Kalyāṇamitra of the Ghoon monastery, An oral central Tibetan Text アジア文化研究論叢第一輯
- 「チベットと中國の歴史的關係」『人民日報』一九五九年
- 外文出版社圖書編譯部「チベット問題」外文出版社(北京)(七月)
- ロバート・フォード著・近藤等譯「赤いチベット」新潮社(五月)
- オフチンニコフ著・木村浩譯「チベットの素顔」講談社(五月)

編輯後記

○爽やかな好季節の大會の日に本號をお届けできるのを嬉しく思います。執筆して下さった西田龍雄・北村甫雨氏、御不幸があつたにも拘らず御執筆下さった佐藤長氏に厚く御禮申し上げます。

○本會發足以來事務を擔當されていた藤本勝次氏が、來る十一月より關西大學在外研究員としてカイロへ遊學されるので、私が學會事務のお世話をする事になりました。萬事不行届ですが、宜しく御指導下さい。

(大庭 脩)